『世の罪を取り除く神の子羊』　ヨハネの福音書１章 29～34 節

1.　証し人ヨハネ

この福音書において、主イエス･キリストの御業や教えが語られているのは２章からです。１章はプロローグ、イエス様のことが語られるための準備の部分です。その準備の部分の主人公はバプテスマのヨハネです。イエス様が活動を開始する前に、バプテスマのヨハネが現れ、荒野で人々に洗礼を授けることによってイエス様のための備えをしたのです。そのヨハネについてこの福音書は１章 6、7 節において「**神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。**」と語っています。そのヨハネの「**証し**」の言葉を語っているのが、「**さて、ヨハネの証しはこうである。**」と始まっている 19 節以下です。本日はその続きである 29 節の冒頭には「**その翌日**」とあります。

ヨハネの福音書がバプテスマのヨハネをイエス様の「**証し**」をした人として描いているのは、ヨハネを、イエス様を信じる信仰の先駆者として、つまり私たちの信仰の導き手として描くためです。イエス様を信じて生きるとは、ヨハネのようにイエス様を「**証し**」しつつ生きることです。イエス様こそが救い主であることを信じ、そのイエス様を人々に指し示していくことです。イエス様を信じ、その救いにあずかって生きる者は、イエス様に対する信仰を言い表し、イエス様の「**証し**」人として生きるのです。その模範がバプテスマのヨハネです。

ところで、19～28 節における「**証し**」においてヨハネは、自分自身のことを語っていました。「私は…ではない。私は…だ」という言い方をしていたのです。自分は何者であるかを語ることによってイエス様のことを指し示し、「**証し**」する、それが前回の箇所におけるヨハネの「**証し**」でした。私たちは、自分自身のことを抜きにしてイエス様のことを「**証し**」することはできません。神の前で、またイエス様との関係において自分は何者かを語ることによってこそ、イエス様を「**証し**」し、指し示すことができるのです。

2.　直接的な証し

ここでのヨハネの「**証し**」は前回の箇所とは違っています。ヨハネはここでは、イエス様とはこういう方だ、と語っています。その中心となっているのが 29 節の「**見よ、世の罪を取り除く神の子羊。**」という言葉です。そして、34 節にはさらにはっきりとした「**証し**」の言葉があります。34 節には**私はそれを見ました。それで、この方が神の子であると証しをしているのです。**」とあります。前回の箇所においては、自分のことを語ることによって言わば間接的にイエス様の「**証し**」をしていましたが、その翌日は、より直接的に、イエス様こそ「**神の子**」であり救い主であるという「**証し**」を語っているのです。

この違いは何によって生じているのでしょうか。その原因が示されているのが 29 節の「**ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。**」という言葉です。ここにも、イエス様を「**証し**」して生きる私たちの信仰にとってとても大事なことが示されています。イエス様についての「**証し**」には、先ほど見たように、自分自身のことを語ることによってなされる、という面が一方であります。しかしそれは他方ではやはり、「イエス様とは、こういう方だ」と直接的に語ることでもあります。そしてそういう直接的な「**証し**」は、イエス様が自分の方に来るのを見る、という体験の中でこそ語り得るのです。つまりイエス様が自分の前に現れ、自分に出会って下さることによってこそ、私たちはイエス様を本当に知ることができ、信じることができ、「**証し**」をすることができるのです。私たちの信仰も、「**証し**」も、イエス様が私のところに来て下さるという恵みを体験し、それに応えていくことの中でこそ生じるのです。

この 29 節の「**その翌日、ヨハネは自分の方にイエスが来られるのを見て言った。**」という記述からは具体的なことが何も分かりません。イエス様が、どこで、どのような状況の中で、どうやってヨハネのところに来たのか、何のために会いに来たのか、そういったことが全く分からないのです。分かるのは、ヨハネがイエス様に会いに行ったのではなくて、イエス様の方からヨハネのもとに来られたのだ、ということだけです。ヨハネの福音書はこのような書き方によって、このことはヨハネに起った特別な出来事ではなくて、私たち一人ひとりに起ることだ、ということを示

そうとしているのです。キリスト者は誰もが、自分がイエス様を探し求めて見出したのではなくて、イエス様の方から自分のところに来て下さった、という体験しているのではないでしょうか。その体験は、礼拝において御言葉を聞いている時に与えられたのかもしれません。あるいは、生活の中の様々な場面で、イエス様の恵みや導きを感じた、ということもあるでしょう。いずれにしてもそこで私たちは、自分がイエス様を探し求めて見出したのではなくて、イエス様が自分のところに来て下さったという恵みを体験するのです。イエス様を「**証し**」することはこのように、イエス様が私たちのところに来て下さったという恵みの中でこそ与えられるのです。

3.　先におられた方

さて、ヨハネはイエス様を見つめて「**見よ、世の罪を取り除く神の子羊。**」と「**証し**」しました。その意味は最後に考えるとして、30 節に「**『私の後に一人の人が来られます。その方は私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。**」とあります。ここで注目したいのは、ヨハネが「**その方**」は「**私より先におられた**」、だから「**私にまさる方です**」と言っていることです。ヨハネの方がイエス様より先に人々の前に現れ、活動を始めたのに、イエス様の方が先におられたというのはどういうことでしょうか。そのことはこの福音書の１章１節以下に語られていたことに基づいています。この福音書は「**初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。**」と語り始められています。ご自身が神であり、神と共にあった「**ことば**」が世の初めにあったのです。天地の全てはその「**ことば**」によって成った、と３節には語られています。初めからあり、天地の創造に関わっておられ、ご自身が神である「**ことば**」。14 節には、その「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」とあります。それは主イエス・キリストのことです。イエス様は世の初めから父なる神と共におられ、天地創造に関わっておられた、ひとり子なる神なのです。だからヨハネのみならず、全ての人よりも先におられたのです。人間となってこの世に現れたのはヨハネの方が先だったけれども、イエス様はまことの神として誰よりも先におられた方であり、それゆえにどんな人間よりもまさっているまことの神であられるのです。

このようにヨハネは、自分の後に来られるイエス様が自分より先におられた方であると語ることによって、イエス様がまことの神であることを「**証し**」しました。ここにも、私たちの信仰にとって大事なことが示されています。それは、目に見える現実においてはヨハネの活動の方が先であるように思われるけれども、実際には、神であるイエス様の方が先に御業を行っておられたのだ、ということです。つまり、私たちは自分が神による救いを求め、救い主イエス様を信じてその救いにあずかり、信仰者として生きていると感じているけれども、実は私たちの思いや決断よりも先に、神であるイエス様が私たちに働きかけ、救いの御業を行って下さっていたのです。私たちがイエス様による救いにあずかり、イエス様の「**証し**」人として生きていく、その信仰は全て、まことの神であるイエス様が先に働きかけ、与えて下さるものなのです。

4.　私はこの方を知らなかった

31 節には「**私自身もこの方を知りませんでした。しかし、私が来て水でバプテスマを授けているのは、この方がイスラエルに明らかにされるためです。**」とあります。ヨハネは「**私自身もこの方を知りませんでした**」と言っています。それは 33 節でも繰り返されています。ヨハネは、イエス様を知っていて、この方こそ救い主だと信じたので「**証し**」をしたのではなかったのです。自分がイエス様を知っており、この方こそが救い主だと信じたから「**証し**」をしたということだったなら、ヨハネの信仰ないし判断が先にあったということになります。しかしそうではなかったのです。彼は、イエス様のことを知る前に、これから現れる救い主の「**証し**」を始め、その方が現れるための備えとして洗礼を授けていったのです。なぜそんなことを始めたのか。それは 33 節に「**私自身もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けるようにと私を遣わした方が、私に言われました。**」とあります。つまりヨハネは、神の促しを受け、神に遣わされて、人々に洗礼を授ける者となったのです。それは彼自身の判断や決心によることではなくて、神の御心だったのです。その時点で彼は、自分が誰のことを「**証し**」し、誰を指し示すために洗礼を授けるのかを知

りませんでした。

神がその時彼に語り掛けた言葉が 33 節後半に語られています。「**御霊が、ある人の上に降って、その上にとどまるのをあなたが見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者である。**」。いずれそういう人があなたの前に現れる、その人のことを「**証し**」し、指し示すために人々にあなたは人々に洗礼を授けるのだ、そういう御言葉によって神は彼を「**証し**」人としてお遣わしになったのです。

「いやちょっと待ってくださいよ」と言いたくなります。「誰のことを「**証し**」するのか、その方はどのような方なのか、もっとはっきりと示してくれなければ「**証し**」なんてできません。こんな状態で遣わされても困ります」と私たちなら言うでしょう。それが当たり前です。ヨハネだってそう思ったことでしょう。「**私自身もこの方を知りませんでした。**」と二回語られていることがそれを示しています。しかしまさにここに、イエス様のことを「**証し**」していく信仰者の歩みとはどのようなものかが示されているのです。そこにおいては、私たちの理解や思いや決断よりも、私たちを選び、召し、お用いになる神の御心が先にある、ということです。私たちは、イエス様のことをしっかり理解し、分かった上で、この方を信じて「**証し**」していこうと決心して信仰者になるのではありません。もしそうなら、そこでは神の御心よりも私たちの思いや決断の方が先にある、ということになります。しかし私たちの信仰は私たちの理解や決断から始まるのではなくて、神の御心から、神が私たちを選び、語りかけ、召し出し、遣わして下さることから始まるのです。私たちは、神の語りかけにとまどいながら、半信半疑で、神の促しに従って歩み出します。その歩みの中で、イエス様のことがはっきりと示されていくのです。

ヨハネは、聖霊が鳩のように天から降って、イエス様の上にとどまるのを見ました。ヨハネの福音書はその場面を語っていませんが、他の福音書によれば、それはイエス様がヨハネから洗礼を受けた時のことです。ヨハネのもとに洗礼を受けに来た多くの人々の中に主イエスがおられたのです。自分が洗礼を授けた主イエスの上に、聖霊が降り、留まったのを見たことによって彼は、「**私はそれを見ました。それで、この方が神の子である**」ことをはっきりと知ることができたのです。私たちも、神の語りかけを受け、神の促しに従って、はっきりと分かってはいないながらも信仰の道を歩んでいく中で、聖霊の働きによって、神の子であり救い主であられる主イエス・キリストを示され、そのイエス様が自分のところに来て下さることを体験するのです。そこに、イエス様こそ神の子、救い主であるという信仰の告白が与えられていきます。その信仰告白によって私たちも、イエス様を「**証し**」する者とされていくのです。

5.　世の罪を取り除く神の小羊

ヨハネがイエス様を「**証し**」して語ったのは、「**見よ、世の罪を取り除く神の子羊。**」ということでした。この「**証し**」は 36 節にも繰り返されていて、ヨハネの「**証し**」の中心がこの言葉であることが分かります。

この「**神の子羊**」とは何かを語っているのが、イザヤ書 53 章 7 節です。そこには「**彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。**」と語られています。ここには、口を開かず、黙って、屠り場に引かれていく、あるいは毛を切る者に身を任せる「**子羊**」のことが語られています。

その「**子羊**」は、この 53 章全体の主題である「主のしもべ」の姿を示しています。この「主のしもべ」は、2 節から 3 節によれば、見るべき面影はなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない、人々に軽蔑され、見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている人でした。しかし 4 節は「**まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。**」と語っています。5 節にも「**しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。**」とあります。

ヨハネがイエス様を指して「**神の子羊**」と言ったのは、イエス様こそこの「**子羊**」が表している「主のしもべ」であるからです。「主のしもべ」は、自らは何の罪もないのに、人々の罪を背負って裁きを受け、命を取られました。そのことによって、人々の罪の償いをし、罪の赦しを実現したのです。つまり人々の罪を取り除いたのです。そしてそれ

は、彼を遣わした主なる神の御心だったのです。罪ある人々を赦し、罪を取り除いて救って下さるために、神ご自身が遣わして下さった僕、それがイエス様です。神はこの「神の子羊」として、ご自身のひとり子、世の始めにおられ、天地の創造に関わっておられたまことの神である「ことば」を、人間としてこの世に遣わして下さったのです。

旧約時代の「子羊」の供物は常に象徴的なものであった。しかし「神の子羊」であるイエス・キリストは肉も血も備えられた正真正銘の人間でした。しかも「キリストは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。」(Ｉペテロ 2:22)。それは「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」(Ｉペテロ 2:24)でした。また、ペテロ第一 1 章 18～19 節に「ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」とあります。

「子羊」のいけにえは、ユダヤ人の宗教生活といけにえの制度において非常に重要な役目を果たしました。バプテスマのヨハネが、イエス様を指して、「世の罪を取り除く神の子羊」と言った時、それを聞いたユダヤ人は直ぐにその幾つかの重要ないけにえの一つことを思ったでしょう。過ぎ越しの祭りを控えていたので、最初に思ったのは過ぎ越しの「子羊」のいけにえのことだったかもしれません。過ぎ越しの祭りは、ユダヤ人の主要な祭りの一つで、神がイスラエルの民をエジプトから脱出させてくださったことを覚えて祝う祭りです。実際、 過ぎ越しの「子羊」をほふり、その血を家の二本の門柱とかもいに塗る（出エジプト 12 章 11～13 節）のは、キリストの十字架での贖いのわざを美しく絵にしたものなのです。

「子羊」に関するもう一つの重要ないけにえには、エルサレムの神殿で毎日捧げられていたいけにえがあります。神殿では、毎朝夕、民の罪のために、「子羊」がいけにえとして捧げられていました（出エジプト 29 章 38～42 節）。これらの日々のいけにえは、その他のすべてのいけにえと同様に、ただキリストの十字架における完全ないけにえが来るということを、民に指摘するためだけのものでした。事実、イエス様が十字架で死なれた時刻は、ちょうど神殿で夕べのいけにえが捧げられていたときでした。 当時のユダヤ人は、旧約聖書の預言者、エレミヤやイザヤのことを聞きなれていました。その預言者たちは、「屠り場に引かれて行く羊のよう」な方が来られること、その方の苦しみと犠牲がイスラエルの救いとなることを預言していました。もちろん、その方はイエスキリスト以外の誰でもない、「神の子羊」なのでした。

イエス様がこの「世の罪を取り除く神の子羊」であることをヨハネが示されたのも、イエス様が自分から洗礼を受けたことを通してだったでしょう。ヨハネが授けていた洗礼は、罪の悔い改めの印でした。自らの罪を認め、神に赦しを求める、ヨハネが授けていたその洗礼をイエス様がお受けになったのです。神の子であられるイエス様は、洗礼を受ける必要など全くない方です。イエス様は、罪人である私たちと一つになり、私たちの罪をご自分の上に引き受け、背負うために、洗礼を受けて下さったのです。そのようにして、「世の罪を取り除く神の子羊」になって下さったのです。

そのイエス様に聖霊が降り、とどまるのを見たヨハネは、主なる神が、ひとり子なる神イエス様を、「世の罪を取り除く神の子羊」として遣わして下さり、そのイエス様がやがて十字架にかかって死ぬことによって私たちの罪の贖いを成し遂げて下さること、そのイエス様による救いが、イエス様の名によって洗礼を受ける者たちの群れである教会において人々に与えられていくことを示されたのです。33 節に、イエス様が「聖霊によってバプテスマを授ける者である」と語られていることはそういう意味でしょう。ここには、この福音書が書かれた教会において授けられている洗礼が意識されているのです。聖霊による洗礼は、私たちが救い主イエス・キリストと一つにされ、キリストの体である教会に連なる者とされる、水による洗礼と別のものではありません。私たちが洗礼を受けて教会に連なる者とされる時に、イエス様の上に降り、とどまった聖霊が私たちにも注がれ、私たちを、イエス様による救いにあずからせ、そして私たちにも、イエス様こそ「世の罪を取り除く神の子羊」であるという信仰の告白を与えて下さるのです。この聖霊の働きを受けることによって私たちも、イエス様の「証し」人とされていくのです。